

令和5年度 第2回白根巨摩中学校自己評価書（後期）

令和6年1月9日作成

校長 笹本 忠彦

記述者 教頭 小林紀浩

学校教育目標

「思いやりの心と主体性・創造性を備えた白根巨摩中生の育成」

- ・学ぶ喜び・創り出す喜びを知り、主体的に学習する生徒
- ・正義を尊び、思いやりをもつ心豊かな生徒
- ・素直に見聞きし、考え、お互いを高め合う生徒
- ・心身ともに健康で、たくましく生きる生徒

取組重点

- 学習意欲と確かな学力の向上
 - ①教材研究の充実、効果的な授業の組み立て、学び合いを通しての深い学びの実現
 - ②信頼関係が保障される学級集団づくり
 - ③ICTの積極的な活用
 - ④家庭学習のさらなる改善
- 新学習指導要領の確実な実施と小中一貫教育に向けた取組の推進
 - ①新学習指導要領に基づく教育活動の改善
 - ②9年間を見通した教育課程の編成と改善
 - ③小中間での交流の推進（職員、児童生徒）
 - ④小中一貫教育に関する保護者・地域の理解の促進
- 生徒会活動における「4つのこだわり」と創造的な特別活動の推進
 - ①生徒会が掲げる「4つのこだわり」（挨拶・清掃・時間・服装）の、生徒主体での推進・充実
 - ②これまでの成果をもとにした創造的な特別活動の推進

I 全体評価

※A：5点、B：4点、C：2点、D：1点と換算し平均4.5を目標と考えた。1回目に引き続きこの指標を使い学校評価について考えていく。また、生徒及び保護者は平均4.0を目標とした。

全21項目中18項目が目標を上回る結果となった。得点分布に関しては以下のとおりである。

（後期）4.5以上：18項目、4.3以上4.4未満：1項目、4.2以上4.3未満：1項目、4.0以下：1項目

（前期）4.5以上：18項目、4.3以上4.4未満：2項目、4.0以下：1項目

後期の総合平均は4.5となり、前期自己評価の平均4.6とほぼ同様の結果となった。前期よりも向上した項目もあり、課題点への組織的・継続的な取組を行うなど、教師・生徒が目標達成のために努力した成果が出ていると考えられる。

特に「より良い学校にするために他の教職員と協力し取り組んでいる」の項目は前期より向上し、4.9を上回った。白根巨摩中学校の教職員がチームとして一体となって取り組んだ成果だと考えている。この他、前期より向上した項目として「計画的な家庭学習の手だて」（4.3→4.5）と「授業におけるパソコン（ICT）の有効活用」（3.7→4.0）、「部活動の指導」（4.3→4.5）などがあげられる。これらはいずれもここ数年間の課題として取り組んできた課題である。今回向上したのは、校内研を中心に、授業等におけるICTの活用に関する研修を行う中で、少しずつ授業の中でICTを使用する教師が増えたことや、1人1台端末の持ち帰りによる週末課題の実施による効果であると考えられる。部活動については、複数顧問制や地域人材の活用による効果だと考える。

いっぽう、課題点としては、依然として「ICTの有効的な活用」があげられる。同質問に対し、「保護者」（4.0）も評価得点が低くなっており、引き続き有効な活用に向けて取り組む必要がある。また「生徒の自治力の向上」（4.5→4.1）が前期から大幅に減少している。日常の生徒会活動や行事への取組など、生徒主体の活動を支援する教師の在り方について確認、共有していく必要がある。

来年度以降も教職員や地域・外部機関等がチームになって、学校教育目標の達成のために課題解決にむけた効果的、継続的な取組を行っていく必要がある。また小中一貫教育についても小学校との連携をさらに深めながら、計画的で効率的な教育活動が行えるよう目指していきたい。

II 各領域の評価	
1 学校運営	
達成状況	<p>◇領域平均は4.7であり、前期と同じである。「学校教育目標の具現化」と「重点目標への取組」は0.1ポイント下がったが、全ての項目で目標値である4.5を超えた。特に「他の教職員との協力」の項目は4.9である。職員室での様子や教職員一人一人の姿勢からも、本校の職員は学校教育目標の具現化に向けて真摯に努力しているといえる。</p> <p>◇報告・連絡・相談・確認を適切に行っていて、職場相互の信頼関係も良好である。</p> <p>◇コロナ前の教育活動が戻りつつある中、職員が個々の分掌に責任をもって、学園祭、強歩大会、合唱発表会等多くの行事を成功させたことへの成果が数値に表れている。</p>
対応	<ul style="list-style-type: none"> ・次年度以降も各種行事の内容等を工夫しながら、生徒主体の教育活動を推進していく。行事・活動を生徒とつくりあげる過程を大切にし、充実感ある取組を教職員の支援のもとに行う必要がある。 ・学校全体の教育活動に対して、教職員の相互理解のもと、組織的な取組を行う中で、課題を把握・改善しながらPDCAサイクルに乗せ、工夫と向上を目指す。 ・各自が勤務効率を考えた働き方についてセルフチェックを行い、ライフワークバランスを意識した勤務の在り方を共有していく。一人で悩むことのない開かれた職場環境を作りながら、管理職は教職員のメンタルヘルスについて細心の注意を払うよう心がける。
2 教科指導	
達成状況	<p>◇領域平均は4.4であり、前期より0.1ポイント向上した。</p> <p>◇教師アンケート「校内研究のもと、深い学びの実現を目指した授業づくりに努めている」は前期と同様の4.5であり、校内研を通じて、授業改善に取り組んだ結果である。</p> <p>◇校内研究のテーマである授業での「聴き合う」指導について、生徒アンケートでは「先生や友達の話をしっかり聴くことができたか」の項目の肯定的回答が97%を超えた。コロナの5類移行に伴い、授業内でのグループ活動も活発化していることの成果ともいえる。</p> <p>◇生徒アンケートの肯定的回答が「学校の授業は楽しい」は88.6%、「学校の授業がわかる」は87.3%となり、他の設問より数値はやや低いものの、多くの生徒が授業に主体的に取り組んでいることがわかる。ただ、基礎学力に不安のある生徒への対応は今後も検討していく必要がある。</p> <p>◇保護者アンケートの肯定的回答が「お子さんは、授業の内容がわかっていると思うか」は75%となっていて、項目の中で一番低くなっている。「学校は基礎学力定着のための指導をしていると思うか」が93%となっており、学校の指導方法については一定の理解をいただいているものの、成果については課題があることがうかがえる。</p> <p>◇家庭学習においては長年課題であったが、本校独自の取組として継続しているタイアップチャレンジ（週末課題）の定着により効果が上がってきている。端末の持ち帰りを活用した課題の提出も、効果を上げる要因となっている。生徒の肯定的回答は92.4%、保護者の肯定的回答も89%と高く、タイアップチャレンジを通じて家庭学習に向かう姿勢に積極性が見られようになった。今後も家庭の協力を得る中で、さらなる質の向上を行っていく。</p> <p>◇「ICTの有効的な活用」については、昨年同期や本年前期から着実に向上しているが、他の項目と比較するとまだ低い数値となっている。教職員の研修の成果が出てきているので、引き続き、有効活用に向けた研修等を行っていく必要がある。</p>

<p>対応</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ以前の活動が戻る中で、校内研究のテーマである「聴き合い」や「学び合い」を通して互いを高める生徒の育成を目指していく。そのための手立てとして、これまで以上にICTを有効活用できるように研修を行っていく。また、指導と評価の一体化の観点から、学習指導要領に対応した学習指導・学習評価についても研究を推進していく。 ・教師個人の授業力を高めるために、互いの授業を参観する機会を確保する。互いの工夫や改善について話し合い、具体的な改善ポイントについて共通認識をもてるような研究を行う。その際、ICTの活用についても重要な視点として共有を図るようにする。 ・タイアップチャレンジを継続すると同時に、1人1台端末の持ち帰りを増やすことで、個別最適な学びにつながる課題の出し方についても工夫しながら実践していく。合わせて生徒の連絡帳（やりとり帳等）や定期試験の学習計画表の取り組み表を活用して、生徒が計画的に家庭学習を進めるように指導する。 ・1人1台端末を授業でさらに有効活用するために、ICT活用頻度を高めるための研修や取組を継続的に行っていく。 ・小中一貫教育の取組において、さらに小学校の教職員との相互理解を深め、9年間を見通したきめ細かい児童生徒の育成を研究する。 ・保護者アンケートの数値の結果や記述内容から、引き続き基礎学力の定着や家庭学習の定着についての学校への期待は大きいことがわかる。「補充・発展の時間」等の効果的な活用、基礎学力定着のための支援体制の見直し、不断の授業改善等、今後も努力していく。
-----------	--

3 生徒指導について

<p>達成状況</p>	<p>◇平均得点は4.7で前期と同様である。本校の教職員が継続して生徒に寄り添い、きめ細かい生徒指導を行っていることがわかる。</p> <p>◇生徒アンケート「学校生活は楽しいか」の項目において、前期よりも平均得点が0.1ポイント上昇し、肯定的回答が95%を超えた。また、「困ったときに相談できる先生がいるか」については、前期よりも0.1ポイント上昇し、4.5となり、昨年度からも上昇傾向がみられる。学年によって若干差はあるものの、生徒との関係の構築ができており、教師が生徒に寄り添い、素早く適切な対応がなされている。また、保護者アンケート「お子さんにとって、学校は楽しい所だと思うか」も肯定的回答は92%を超えており、多くの保護者から理解を得て教育活動に取り組んでいると考えられる。</p> <p>◇関係機関と連携しながら不登校等のケース会議を行っている。また学区内の小学校にも勤務するSC、近隣の未成年の事件等に係るSSを交えた生徒指導支援委員会を毎週開催し、生徒の生活環境も含めた生徒指導に心がけている。また、生徒とのやり取り帳（連絡帳）や、年5回の心配事アンケート調査と個人面談等により、生徒の様子を見取り、適切に指導しており、状況に応じて外部機関からの支援や助言を参考にしながら、個に応じた支援を心がけている。</p> <p>◇保護者アンケート「学校は、子どもの困ったことや悩み事等に、対応していると思うか」の肯定的回答は93%を超えている。ただ、「学校での生徒の様子を保護者と共有できているか」については、「できている」と感じている割合が、保護者が約91%、生徒は約88%とやや低い。学校で生徒一人ひとりの様子を注意深く見守り、保護者との情報共有を密にする中で、保護者とのより一層の連携を取る必要がある。</p>
-------------	--

<p>対応</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・問題行動の未然防止策として、生徒への声かけを積極的に行い、道徳や総合、特別活動などの授業を通し、心の教育をさらに充実させる必要がある。さらに、問題を抱える生徒や人間関係について、情報共有を素早く確実に担任や学年で行い、家庭にも伝えることで、早期に解決していく。 ・今後も全教職員が相互に連携し、学校のきまりや指導重点について共通理解し、組織的な生徒指導を行う。また、学年を問わず報告・連絡・相談・記録などを丁寧に行い、必要に応じて関係機関とも連携していく。 ・小学校との連携を密にし、小学校での様子や人間関係を共有し、相談できる体制を構築する。「やりとり帳」や「悩み事アンケート」、担任との二者懇談等、日常的な生徒とのコミュニケーションの中から、トラブルを未然に防ぐように対応する。 ・SNSにおける危険性など、様々な生徒指導の未然防止に向けて、外部の専門機関等を招聘し、具体的な事例を踏まえた指導を行っていく。
-----------	--

4 特別活動

<p>達成状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◇この項目の平均は4.5で、前期4.6より0.1ポイント下がった。2学期は活動の制限もほとんど設けず、予定していた全ての行事に取り組むことができた。教職員も生徒たちと苦労をともにし、生徒との一体感をより多く感じたと考えられる。生徒アンケートの「行事への満足度」の肯定意見は97%を超えた。学園祭や合唱活動は長期間取り組み、コロナ前とほぼ同じ形式で実施したことで充実感が得られたと考えられる。 ◇生徒アンケートでは「生徒会活動」「行事への協力」「合唱活動」のいずれにも96%以上が肯定的評価であった。なかでも「行事はみんなで協力して楽しくできているか」については、約98.7%が肯定意見であった。生徒たちが行事を通して、協力しながら目標を達成しようとする様子がわかる。大きな達成感を味わうことができたと思われる。 ◇「部活動の指導」の評価が前期の4.3から4.5に上昇した。複数顧問制の導入や外部指導者の協力により、部活動指導への取組に対する自己評価が高まってきていると考えられる。部活動の地域移行を含め、今後も地域指導者の部活動への支援を広げていく必要がある。
-------------	--

<p>対応</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度はコロナの5類移行に伴い、以前の活動が戻ってきた年であった。行事についても、ほとんど制限なく実施することができ、教職員も生徒も、目標に向かって意欲的な活動行うことができた。来年度以降は、行事の内容等について精査・工夫しながら、生徒の心身の成長に寄り添ったものとなるように計画していく必要がある。特別活動を積極的に行っていくことは、より良い人間関係の構築や日常生活のルールを守ること、社会貢献の教育的意義等を学ぶことにつながる。 ・各行事の反省を分析し、行事および生徒会活動全般を見通しながら、来年度の年間計画に位置付けていく。生徒が自主的・主体的に取り組むことができるよう教師の支援体制についても工夫していく。 ・この教育環境を維持するためにも、部活動への関り（土日休日移行制の進捗）も含め、教職員のライフワークバランスへの意識を高め、教職員が疲弊しない取組も視野に入れ、検証・改善していく。
-----------	--

5 健康安全 信頼される学校 他

達成状況

- ◇今年度「教職員としての自覚を持って、職務に従事している」は4.8となり、本校の教職員が教員としての責任と自覚をもって、生徒を育成に携わっていると考えられる。
- ◇教員アンケートの領域平均は「健康安全」が4.6、「信頼される学校」が4.7で、感染症防止対策における日常の生徒への健康安全の配慮、過ごしやすい学校生活に対する生徒への細やかな対応、施設の整備についての意識は高い。
- ◇保護者アンケート「保護者の相談等に丁寧に対応しているか」の設問に97%、「通信・メール等で学校の様子を伝えていると思うか」の設問に96%が肯定的回答をしていることから、学校は、保護者にとって相談しやすく、お互い様子が伝わりやすい環境だと考えていることがわかる。
- ◇保護者アンケート「学校は子どもの安全に配慮し、安全管理及び安全指導に努めていると思うか」の項目について、肯定的回答は約96%であることから、本校教職員が子どもの心身の安全に配慮しながら教育活動に取り組んでいると保護者が考えていることがわかる。
- ◇生徒アンケート「家の人と学校生活の様子などについて話をするか」は4.4でやや低い評価になっているが、令和3年度から向上傾向がみられる。ただ、否定的回答は12.3%で1割以上の生徒が家庭での保護者とのコミュニケーション不足であることがうかがえる。このことから、学校での様子について各家庭との連携を深める取組を行っていく必要がある。

対応

- ・学校生活において心配な状況のある生徒については、家庭環境も把握し、状況に応じて全職員に情報共有しながら、組織的な生徒指導を行っていく。また、生徒と保護者のコミュニケーションを図る方策として、家庭への電話連絡はもとより、連絡帳や通信等を活用する。
- ・「学年だより」「給食・保健・図書・進路だより」「学校メール」等学校からの情報発信を積極的に行うとともに、それらを通して家庭との連携を密にし、生徒の健全育成に向けて一層努力する。特に、様々な情報提供も含め、学校メールを活用して、積極的な情報提供を行っていく。
- ・教職員の学校設備や状況把握、様々な危機的な状況を想定する意識を高める必要がある。日々の教育環境の点検、生徒のきめ細かい見取りなど、全教職員が情報共有を行いながら教育活動に取り組む中で、学校教育目標の具現化を図っていく。
- ・部活動や特別活動の指導において、安全対策や指導方法について、事後に反省・検討・改善を行い、常に改善すべき点や努力すべき点について全職員で情報共有していく。
- ・今後も地域からの声や支援を大切に、本校の「PTA」「体育・教育後援会」等の組織を積極的に活用したり、地域の関係機関と協力したりしながら地域全体で子どもを育てる意識を醸成する。